SDGsチャレンジプログラム

学長賞に商・小山チーム

付属高チームが初入賞

学長賞受賞の喜びを語る小山チーム

「専修大学SDGsチャレンジプログラム2023」の表彰式が12月16日、生田キャンパスで開かれ、商学部・小山チームが最優秀賞にあたる学長賞を受賞した。

本プログラムは、SDGsに対する学生の理解を深めることなどを目的に2020年度から始まった。今年度は「フードロス削減」をテーマに、持続的に実践可能なアクションプランを募集。本学の付属高校や教育交流提携校を含む全44チームが応募。書類審査とプレゼン審査の結果、3チームが入賞した。

小山優衣さん（商3）ら6人が提案した「フードロスを活かそう」が学長賞に輝いたほか、三森友月さん（商3）ら5人による「グリーン・スムージー～フードロスでSDGsを実現～」が校友会長賞を受賞。また、専修大学松戸高校チームの「規格外野菜を擬人化させよう」が育友会長賞に選ばれ、本プログラムで初めて高校生チームが入賞を果たした。

小山さんは表彰式で、「フードロス問題に真剣に向き合った約半年間の過程を大切にしたい」と喜びを語った。

学長賞　商・小山チーム「フードロスを活かそう」

小山さんら6人は、1人暮らしの専大生をターゲットに、食べ切りサイズのミールキットを製造・販売するプランを提案した。「規格外野菜を使う」「売れ残った分は学食で活用して廃棄を出さない」ことで、既存のミールキットとの差別化を図るとともに、フードロス問題の根本的な解決を目指した。

メンバーは全員、コンテスト初挑戦。小山さんは、「SDGsに対する当事者意識が芽生えた。私たちにできることはたくさんあるはず。少しでも興味がある人は一歩を踏み出してほしい」と話した。

受賞者の皆さんと小海会長（前列右から２人目）ら

第24回育友会奨励賞

15人・5団体が受賞

学業、スポーツ、社会貢献など在学生の創造的な行動と成果を顕彰する第24回育友会奨励賞の表彰式が12月16日、神田キャンパスで開かれた。今年度は個人15人、団体5組（別表参照）が選ばれ、小海祐資育友会長から表彰状と奨励金が授与された。

式には、佐々木重人学長、松木健一理事長、廣石忠司育友会主任教授や育友会役員らも出席し、受賞者をたたえた。

川崎市多摩区で大学生のボランティア団体を立ち上げ、清掃活動や民家園通り商店会夏祭りの運営などに取り組んだ秋山寛太さん（経営3）は「専修リーダーシップ開発プログラムでの地域通貨に関する活動をきっかけに、地域貢献を考えるようになった。プログラムでの経験をもとに、自ら問いを見つけ、ボランティア活動を続けている。今後も大学での学びを応用しながら、助け合いの精神を広げていきたい」と語った。

【個　人】　※敬称略

齋藤慎太朗（経済4）	馬　伊芝（経済4）	太樂　岳斗（経済2）
中村　哉太（経営3）	秋山　寛太（経営3）	竹村　結（商4）
道谷　美怜（文2）	笠井　梨瑚（文4）	中島　佳音（文2）
吉田　悠人（文4）	臼井　泰平（文3）	鈴木　梨子（文3）
徳本　雄也（文3）	茂木　美穂（文2）	村上あさひ（ネット情報4）

【団　体】

学園祭出店サークル「ゼロイチ」	代表＝岩澤楓（法3）
専修大学専用学生寮（白山）RA	代表＝鈴木優珠輝（法2）
経営学部森本ゼミナールイベント班	代表＝丸山佳奈（経営3）
商学部マーケティング学科奥瀬ゼミナールDHC班	代表＝永久七海（商4）
フォーチュン映像制作プロジェクト	代表＝森本夏未（文3）

懸賞論文・文芸作品コンクール

文芸部門鳳賞　佐伯さん
柘植光彦文学賞　成田さん

学生部が主催する懸賞論文・文芸作品コンクールの表彰式が12月11日、生田キャンパスで開かれた。文芸作品部門の鳳賞に佐伯友詞さん（文4）が、柘植光彦文学賞に成田陽さん（院文修2）が選ばれた。

佐伯さんの『鹿角の神と転校生』は、「外部から来た少年が通過儀礼を経て村に受容されていく」という文化人類学的要素がモチーフになっている。佐伯さんは、「授業で学んだ民俗学などの知識がベースになっている。4年間の学修の集大成として鳳賞を受賞できたことを励みに、今後も創作活動を続けていきたい」と笑顔で語った。

佐竹弘靖学生部長（右）から賞状を受け取る佐伯さん

柘植賞の成田さんの作品は、『どうせ朝が来る』。主人公の女子大学生が「瞬間的な恋と絶望から立ち上がる瞬間」を描いた。文学研究科の小林恭二研究室で文芸創作に取り組んでいる成田さんは、「光と影のコントラストを用いて主人公の心情を表現することを意識した。柘植賞は一番欲しかった賞なのでうれしい」と受賞を喜んだ。

本年度は論文部門に6作品、文芸部門に29作品の応募があった。懸賞論文部門は鳳賞の該当者はなく、2作品が入選した。受賞作を収録した作品集は3月に刊行を予定している。

専大校友を訪ねて

生コンクリート製造販売会社の４代目　**河島（かわしま）　慎吾（しんご）さん**（平18経営）

良質な生コンで日本の社会基盤支える

1951年創業の河島コンクリート工業株式会社の4代目社長を務める。東京都板橋区に本社と工場を構える同社は、70年に生コンクリートの製造・販売に業態転換。以後一貫して、良質な生コンの安定供給を通じて日本の社会基盤を支えてきた。

「生コンの材料はシンプルだが、配合パターンは膨大。納品先までの距離、季節や1日の寒暖差によって細かく調整するなど、手塩にかけて育てている」と愛情を持って語る。また、適切な温度管理が必要なことから工場を完全遮熱化。夏場は冷却水を使い、品質の安定化に努めている。「これは当社独自の取り組み。品質への徹底したこだわりは、創業時から変わらない」と力を込める。

製品の特性上、ミキサー車で60分以内が商圏となる。「取引先の多くは地元企業。地域に支えられていることを忘れてはならない」。地元の子どもたちの工場見学や職場体験の受け入れ、板橋区との災害時協力協定の締結など、地域貢献にも積極的に取り組んでいる。

商社などでの他社修行を経て入社し、営業部門で活躍していた河島さんに大きな転機が訪れたのは32歳のとき。父の急逝で突然社長に就任することに。整理のつかない気持ちを抱えながらも、「素晴らしい人材や設備を残してくれたので必ずうまくいくはず」と慣れない社長業にまい進し、課題だった財務を立て直した。

社長就任時に心に決めたのは、会社に関わるすべての人たちを大切にすること。「従業員が笑顔で働き、幸せな人生を送れるような会社でありたい」と話す。地域の人気店が協力し、おいしい料理を提供する社員食堂が自慢だ。小学生2人の父親で、「将来、息子たちが『お父さんの会社は良い会社だね』と言って入社してくれたらうれしい」と、子煩悩な一面もぞかせる。

専修大学北海道短期大学から専大経営学部に編入、2年間を生田キャンパスで過ごした。「編入で多くの単位取得が必要だった」と学業に励む一方で、ゴルフ部に所属。「出場のチャンスをつかんだ3年次秋の団体戦が一番の思い出」と懐かしむ。卒業旅行で訪れたカンボジアでは、日本との環境の違いにカルチャーショックを受けた。「日本はチャンスに恵まれた国。どんな状況でも諦めずに努力してほしい」と在学生にエールを送る。

「さまざまな気づきを与えてくれたカンボジアに恩返しがしたい」と話す河島さんは、「現地に学校を建てる」という夢を温めている。

人文科学研究所　公開講演会

人文科学研究所の公開講演会が12月と1月に神田キャンパスで開催された。

12月16日は、文学部環境地理学科の熊木洋太教授と山本充教授が、山という自然と人との関わりについて語った。

環境地理学科の全教員による特別共同研究の成果をまとめた『山地と人間』（専修大学出版局）が出版されたことを記念し、講演会を企画した。

自然災害が専門の熊木教授は、山地特有の災害について解説＝写真。山本教授は、山とのつきあい方や山地の楽しみ方などを日本とヨーロッパの事例を挙げて報告した。

◆

1月20日に神田キャンパスで開催された公開講演会では、関東大震災の朝鮮人虐殺を描いた絵巻を題材に、新井勝紘元文学部教授が講演した。あわせて神田キャンパス図書館Knowledge Baseでは特別展示が開催され、絵巻や関連資料が展示された。